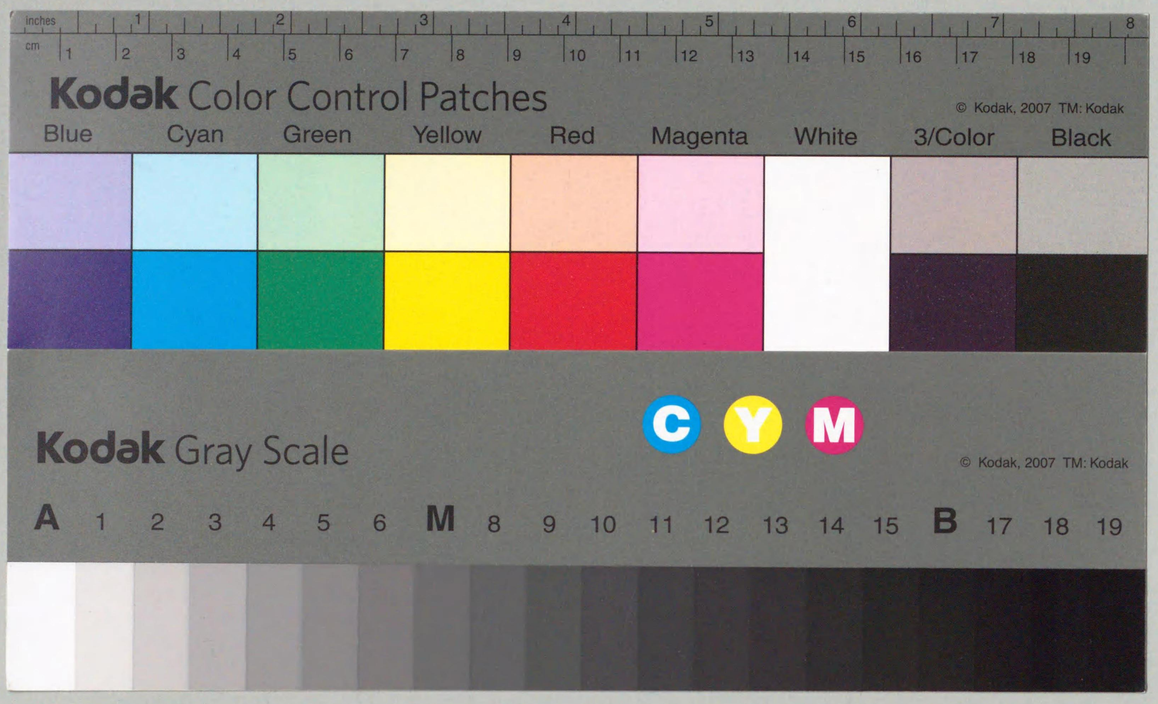

381
13

HYACINTH·EDITION

No 2

詩集

曉と夕の詩

立原道造

千九百三拾七年

詩

集

KH597
H5

國立國會圖書館藏書
I種
W
1200600133080

立原道造

暁と夕の詩

I　或る風に寄せて
II　やがて秋……
III　小譚詩
IV　眠りの誘ひ
V　眞冬の夜の雨に
VI　失なはれた夜に
VII　溢れひたす閨に
VIII　眠りのほとりに
IX　さまよひ
X　朝やけ

或る風に寄せて

おまへのことでいつぱいだつた　西風よ
たるんだ唄のうたひやまない　雨の晝に
とざした窗のうすあかりに
さびしい思ひを噛みながら

おぼえてゐた　おののきも　顎へも
あれは見知らないものたちだ……
夕ぐれごとに　かがやいた方から吹いて來て
あれはもう　たたまれて　心にかかつてゐる

おまへのうたつた　とほい調べだ——
誰がそれを引き出すのだらう　誰が
それを忘れるのだらう……さうして

夕ぐれが夜に變るたび　雲は死に
そそがれて來るうすやみのなかに
おまへは　西風よ　みんななくしてしまつた　と

……秋てがや

やがて　秋が　來るだらう
夕ぐれが親しげに僕らにはなしかけ
樹木が老いた人たちの身ぶりのやうに
あらはなかげをくらく夜の方に投げ

すべてが不確かにゆらいでゐる
かへつてしづかなあさい吐息のやうに……
(昨日でないばかりに　それは明日)と
僕らのおもひは　ささやきかはすであらう

——秋が　かうして　かへつて來た
さうして　秋がまた　たたずむ　と
ゆるしを乞ふ人のやうに……

やがて忘れなかつたことのかたみに
しかし　かたみなく　過ぎて行くであらう
秋は……さうして……ふたたびある夕ぐれに——

小　譚　詩

一人はあかりをつけることが出來た
そのそばで　本をよむのは別の人だつた
しづかな部屋だから　低い聲が
それが隅の方にまで　よく聞えた（みんなはきいてゐた）

一人はあかりを消すことが出來た
そのそばで　眠るのは別の人だつた
糸紡ぎの女が子守の唄をうたつてきかせた
それが窓の外にまで　よく聞えた（みんなはきいてゐた）

幾夜も幾夜もおんなじやうに過ぎて行つた……
風が叫んで　塔の上で　雄鶏が知らせた
――兵士（ピアック）は旗を持て　驢馬は鈴を掻き鳴らせ！

それから　朝が來た　ほんとうの朝が來た
その　また夜が來た　また　あたらしい夜が來た
その部屋は　からつぽに　のこされたままだつた

眠りの誘ひ

私は　おやすみ　やさしい顏した娘たち
私は　おやすみ　やはらかな黒い髪を編んで
それ　おまへらの枕もとに胡桃色にともされた燭臺のまはりには
それから　快活な何かが宿つてゐる（世界中はさらさらと粉の雪）

私はいつまでもうたつてゐてあげよう
私はくらい窓の外に　さうして窓のうちに
それから　眠りのうちに　おまへらの夢のおくに
それから　くりかへしくりかへして　うたつてゐてあげよう

ともし火のやうに
風のやうに　星のやうに
私の聲はひとふしにあちらこちらと……

するとおまへらは　林檎の白い花が咲き
ちひさい絲の實を結び　それが快い速さで赤く熟れるのを
短い間に　眠りながら　見たりするであらう

失なはれた夜に

僕な青灼　泣しき甘　あ青灼　た太灼

灼けた瞳が　灼けてゐた
青い眸でも　茶色の瞳でも
なかつた　きらきらしては
僕の心を　つきさした

泣かさうとでもいふやうに
しかし　泣かしはしなかつた
きらきら　僕を撫でてゐた
甘つたれた僕の心を嘗めてゐた

灼けた瞳は　動かなかつた
青い眸でも　茶色の瞳でも
あるかのやうに　いつまでも

灼けた瞳は　しづかであつた！
太陽や香のいい草のことなど忘れてしまひ
ただかなしげに　きらきら　きらきら　灼けてゐた

眞冬の夜の雨に

だそ時　そつな　とし待眞　どみなあ

あれらはどこに行つてしまつたか？
なんにも持つてゐなかつたのに
みんな　とうになくなつてゐる
どこか　とほく　知らない場所へ

眞冬の雨の夜は　うたつてゐる
待つてゐた時とかはらぬ調子で
しかし歸りはしないその調子で
とほく　とほい　知らない場所で

なくなつたものの名前を　耐へがたい
つめたいひとつ繰りかへしで——
それさへ　僕は　耳をおほふ

時のあちらに　あの青空の明るいこと！
その望みばかりのこされた　とは　なぜいはう
だれとも知らない　その人の瞳の底に？

溢れひたす闇に

美しいものにならう　ほほゑむがよい
涙よ　いつまでも　かはかずにあれ
陽は　大きな景色のあちらに沈みゆき
あのものがなしい　月が燃え立つた

つめたい！光にかがやかされて
さまよひ歩くかよわい生き者たちよ
己は　どこに住むのだらう——答へておくれ
夜に　それとも晝に　またうすらあかりに？

己は　嘗てだれであつたのだらう？
（誰でもなく　誰でもいい　誰か——）
己は　戀する人の影を失つたきりだ

ふみくだかれてもあれ　己のやさしかつた望み
己はただ眠るであらう　眠りのなかに
遺された一つの憧憬に溶けいるために

眠りのほとりに

沈默は　青い雪のやうに
やさしく　私を襲ひ……
私は　射とめられた小さい野獸のやうに
眠りのなかに　身をたふす　やがて身動きもなしに

ふたたび　ささやく　失はれたしらべが
春の浮雲と　小鳥と　花と　影とを　呼びかへす
しかし　それらはすでに私のものではない
あの日　手をたれて歩いたひとりぼつちの私の姿さへ

私は　夜に　あかりをともし　きらきらした眠るまへの
そのあかりのそばで　それらを溶かすのみであらう
夢のうちに　夢よりもたよりなく——

影に住み　そして時間が私になくなるとき
追憶はふたたび　吠息のやうに　沈默よりもかすかな
言葉たちをうたはせるであらう

さまよひ

夜だ——すべての窓に　燈はうばはれ
道がそれればかり　ほのかに明く　かぎりなく
つづいてゐる……それの上を行くのは
僕だ　ただひとり　ひとりきり　何ものをもとめるとなく

月はとうに沈みゆき　あれらの
やさしい音樂のやうに　微風もなかつたのに
ゆらいでゐた景色らも　夢と一しよに消えた
僕はただ　眠りのなかに　より深い眠りを忘却を追ふ……

いままた　すべての愛情が僕に注がれるとしたら
それを　僕の掌はささへるに　あまりにうすく
それの重みに　よろめきたふれるにはもう凋きつた！

朝やけよ！早く來い——眠りよ！覺めよ……
つめたい灰の霧にとざされ　僕らを凍らす　粗い日が
訪れるとき　さまよふ夜よ　夢よ　ただ悔恨ばかりに！

朝やけ

昨夜の眠りの　よごれた死骸の上に
腰をかけてゐるのは　だれ？
その深い　くらい瞳から　今また
僕の汲んでゐるものは　何ですか？

こんなにも　牢屋めいた部屋うちを
あんなに　御堂のやうに　きらめかせ
あの音樂はどこへ行つたか
あの形象はどこへ過ぎたか

ああそこには　だれがゐるの？
むなしく　空しく　移る　わが若さ！
僕はあなたを　待つてはをりやしない

それなのにぢつと　それのペツトのはしに腰かけ
そこに見つめてゐるのは　だれですか？
昨夜の眠りの秘密を　知つて　奪つたかのやうに

昭和拾貳年拾貳月拾日印刷
昭和拾貳年拾貳月貳拾日發行
＊
＊
＊

4230-12